『ベルリンの壁』

120781142 信田 和哉

はじめに

a)ベルリンは不動産価値、生活費が安価
b)パトロンの存在
→ベルリンではIT中心に新興企業が登場
c)2015年には失業率が悪化
d)ドイツ首都ベルリン
→ベルリンの壁の歩みを記述・理解

第1章　ベルリン概観

第1節　ドイツ首都ベルリン

a)1253年、共通都市ベルリンの勲章が作成
→フランデルブルクを意味する「鷲」

b)1280年、構図（二頭の熊が鷲の盾を左右からガード）・「私はベルリン市民の勲章である」の文字

c)最初期の勲章以外はすべて熊の絵を使用

d)ベルリン(Berlin)=松林(bor)+耕作(lorina)?
=魚捕の「簀すの子」(barlen)?

第2節　ベルリンとワイマール共和国

a)1914年6月28日、サラエボ事件
→オーストリアのフェルディナンド夫妻の暗殺→勃発
b)8月1日、ロシア側フランスに対し宣戦布告
c)1915年2月、食糧不足
→パンの配給制度開始
d)レストランで「肉なしデー」導入
e)1918年、第一次世界大戦終結
f)1919年6月28日ヴェルサイユ条約調印
→1920年1月10日、パリで批准・発行
→ドイツに関してフランスで採択、すべての海外領土・植民地の消失、ドイツ東辺部をポーランドへ割譲、徴兵制禁止、兵力制限など

a)ヴァイマル共和国

ⅰ）1918年、帝政崩壊により誕生

ⅱ）1933年、ナチス台頭により崩壊

ⅲ）国民主権を確立、基本的人権、労働権の保障が有、議会制民主主義の国

a)1920年、首都の混乱収束×(敗戦による)
→右翼のクーデター事件発生
b)左右両勢力衝突と
　　犠牲者埋葬のサイクル
＋破局的インフレ（1923年、マルクは下落）
→アメリカ案により沈静化
c)ドーズ案・・・第一次世界大戦時のドイツの賠償方式を緩和の方式
d)対戦に敗北の結果
　　・・・帝政崩壊→共和国家

a)ドイツ初共和国初代大統領
→フリードリヒ・エーベルト
(任期1919~1925)
・・・左右両派から非難攻撃、共和国の安定に尽力
→1925年2月に死去
b)3月、後継大統領選出
→ヒンデンブルク(任期1925~1934)当選
→ヒトラーを合法的に首班に指名
→政権の座

第3節　第二次世界大戦への道と敗戦

a)1929年10月25日、ニューヨーク・ウォール街の株式が大暴落(暗黒の金曜日)

→世界各国で急速に財産減少

→世界恐慌へと発展

b)ドイツ・・・大幅な失業者の増加

＋ナチス勢力増大

→敗戦10年、政治的、経済的基盤の脆弱性

a)ナチ党・・・第一次世界大戦後、登場の団体

→ヒトラーという指導者に結束の大衆的政治運動

b)全身は1919年、ミュンヘン創設の小さな政治団体である国家社会主義ドイツ労働者党

c)ドイツ各地で多数結成の反ユダヤ反ユダヤ主義

d)1919年9月、アドルフ・ヒトラー加入、大衆演説能力によって出現

a)1936年8月1日～16日、第11回オリンピックがベルリンで開催

→世界恐慌からのヒトラー政権下の繁栄示唆

b)国家社会主義に対する外国の懸念を払拭

→国際協調の平和主義をアピール(企み)

a)1938年3月、ヒトラーは祖国オーストリアを武力制圧の脅迫・強引併合

b)1939年、第二次世界大戦勃発

→ヒトラーのポーランド侵攻が原因

c)フランス、イギリスはポーランド支援

→9月3日、ナチス・ドイツに宣戦布告

→9月17日、ソ連も東部ポーランドに進軍

・全面戦争

a)1940年8月25日、ドイツ、ロンドン爆撃
→イギリス、ベルリン報復爆撃
b)1943年、激化
→43年8月6日ベルリンからの疎開
c)11月、英空軍による絨毯爆撃
d)44年3月、米空軍による爆撃開始

a)1945年4月16日、ベルリン攻防戦突入

b)21日、ソ連軍、ベルリン郊外地区に侵入

→市内戦へ

c)5月7日、ドイツ司令官とソ連司令官降伏文書

→ドイツ了承、無条件降伏

d)ヤルタ会談

→戦後ドイツの分割管理の基本方針

第2章　戦後のベルリン

第1節　廃墟と化したベルリン

a)1945年4月30日、ヒトラー自殺
b)東ドイツ、東ベルリンはソ連軍が占領
c)ベルリン攻防戦の結果
→70％以上の家屋が全壊or半壊

a)1945年8月からのベルリン配給五段階制

ⅰ)重労働者と優れたインテリ

ⅱ)労働者、芸術家、エンジニア、教師

ⅲ)ホワイトカラー

ⅳ)子供

ⅴ)主婦、失業者

→第二カテゴリーの配給目的で、

労働女性増加

第2節　連合国占領下のドイツ

a)連合国米英仏ソの4カ国の共同管理下

b)1945年6~8月、4カ国占領軍が占領地区進駐

c)7月17日~8月2日、ポツダム会談

→日本の戦後処理・占領政策全般について

ⅰ)トールマン(米)

ⅱ)チャーチル(英)

ⅲ)スターリン(ソ)

a)米ソ両国は世界を二分化の「超大国」
→第二次世界大戦が日独伊が敗北の結果
b)両国の間に緩衝国として存在可能な国家
×
→米ソの東西対立の激化(自由vs社会主義)
c)上記の結果→3つの東西対立の誕生
ⅰ)南北朝鮮
ⅱ)南北ベトナム
ⅲ)東西ドイツ

a)1948年3月20日、
「ドイツ管理四ヵ国理事会」
→開催中にソ連が退場
b)東西の思考
　ⅰ)西側：ソ連占領地域から分断西ドイツ形成
　　→ソ連への対抗という利害
　ⅱ)東側：ドイツ統一
　　→ドイツ全体からの賠償という利害

第3節　ドイツ分断

a)1948年、東西はすでに分裂状況

b)ソ連と連合3国との対立が激化

c)1948年6月、東西の共通通貨の交渉が挫折

d)6月18日連合国は占領地区に別の通貨導入

→西ドイツマルクの導入を決定

→ソ連は対抗で東独マルクの導入

a)4つの地区の最高権力者は各国の軍司令官

→4カ国による共同占領政策挫折

b)「ベルリンは将来の統一ドイツの首都」

→4国のそもそもの合意

c)1948年6月23日、ソ連は西ベルリンを封鎖

→11ヶ月で終了(原因：通貨改革)

→米ソの軍事的政治的対立は深刻さ増大

→東西ベルリンの分裂は決定的

a)ベルリン封鎖＆4国管理理事会の機能
×
→ドイツ東西分断
b)1949年5月、ドイツ連邦共和国(BRD)の成立
→10月ドイツ民主共和国(DDR)の建国
c)ⅰ)東ベルリンは後者の首都
　ⅱ)西ベルリンの首都はライン川沿いのボン

a)東独政府はベルリンを最重要工業都市再建

→首都再建の費用の重圧が東独経済を圧迫

b)1949年、東からの脱走者・移住民の増加

c)1953年6月15日、住民建設者が就業を拒否

→労働ノルマ10％増加による

a)東西格差

ｉ）西ドイツ（戦後復旧・経済成長）

→農業の機械・合理化

→工業部門（輸出）で発展

ⅱ）東ドイツ（ソ連による農地改革）

→生産設備の押収・主要産業の国営化

→物不足による消費低迷

b)東ドイツ政府が壁建設を決定

（原因）東西格差、デモ、西ドイツへの大量逃亡

第3章　ベルリンの壁

第1節　ベルリンの壁建設

a)1945年～1961年で250万人の脱走者
b)1961年8月13日、ベルリンの壁着工
→有刺鉄線、人の背丈以上
c)警察が夜中に都市内国境48キロ・
　　西ベルリンを囲む環状線160キロを閉鎖
d)ソ連は軍事的に建設を援護・表面化×

第2節　壁の影響

a)240万人の逃亡者のうち

ⅰ）40000人が民主共和国の厳重警備

ⅱ）5000人がベルリンの壁

→1964年まで（遮断・検問が不完全）

b)1980年～1988年までのⅰは2700人

a)逃亡の動機

ⅰ)壁建設前

政治的理由:56%

経済的理由:10%

ⅱ)1980年(重複可)

言論の自由の欠如:71%

政治的圧迫:66%

旅行の自由の制限:56%

生活苦46%など

a)着工後、東西間のプロパガンダ発生
b)数か月間の自殺率上昇
→突然の分断が原因
c)38000人の兵員への発砲命令
→壁建設9日後、最初の射殺は8月24日
d)壁建設から一年後,130の監視塔
e)半年後、空洞ブロック壁建設
f)1965年監視塔増設

第3節　東ベルリン

a)壁は東ドイツ人を窮屈さ・監禁状態・隔絶感を付与

b)高い自殺率

c)共和国民は一生涯、東ドイツで順応強制

→人口の流出を防ぐ

第4章　壁の破壊

第1節　再統一に向けて

a)ソ連がアメリカに次いで、公に原爆所持公表

b)1962年、ソ連がキューバ共和国にミサイル発射基地の建設を開始

→緊張状態→戦争回避

第2節　崩壊の筋書

a）1969年10月28日、連邦首相ヴィリー・ブラント（1913~92）の初の施政方針演説
→東西統一のため国民の結束が目的
ブラントは
b)1970年、ソ連・ポーランドと
c)1972年、東ドイツと
和平条約を締結
→国際法的に双方の間で並存と共存の道が模索

a)1971年9月、米ソ英仏四か国条約締結
→ベルリンの地位に関して
b)同年12月、ベルリン通行協定締結
→両独間の最初の正式協定
c)1972年12月、基本条約により正常化
→西独、西ベルリン市民が東独訪問
d)1973年9月、東独・西独が国連に加盟
→東独、国内に世界の影響を不安視
e)1975年8月、ヘルシンキ宣言
→欧州における現状維持と人権の尊重

a)1979年12月ソ連、アフガニスタン侵攻
（目的）共産党勢力拡大
→アメリカ非難
b)ソ連、軍拡競争に対抗可能な経済力維持
→軍事費膨張による経済危機発生
c)1985年、ミハエル・ゴルバチョフがソ連共産党書記長に就任
→1986年からグラスノチとペレストロイカ改革政策を推進

a)ゴルバチョフ、軍事費を抑制、財源を国内の諸改革に活用

→ソ連全体の徹底した改革と刷新を断行の考え

b)徹底した変革と高い透明性の確保

→スローガン

c)ゴルバチョフ国全体に対する権力を保持

→矛盾

→ソ連共産党の衰退

a)ソ連による軍事介入の恐怖消失

→ソ連共産党の衰退

→祖国と社会の自由・民主化の要求運動が可能

b)ポーランド、ハンガリー、チェコスロバキアなど共産主義国諸国において支配・抑圧の権力機構が瓦解

→東ドイツでも街頭デモ、抗議集会が開催・影響大

第3節　ベルリンの壁崩壊

a)1989年7月以降、雪崩現象
b)共和国内での改革停滞に失望
→出国圧力が増大
c)9月4日、1200人が出国デモ
d)9月25日、8000人がデモ参加
e)10月末、数十万人がデモ参加

a)出国申請増加、デモ拡大と並行

→他方で逃亡が拡大

b)逃亡

ｉ）秋までに共和国市民がプラハ、ブタベスト、ワルシャワの連邦共和国大使館

ⅱ）9月、ハンガリー、オーストリアとの国境

→最初の逃亡は8月19日、661人がソプロン近郊を利用

c)9月11日以降ハンガリー、民主共和国出身ドイツ人の西側出国許可

→月末までに3万人

a)1989年11月3日、モスクワ政治局、壁破壊提案

→世界から壁破壊支持

b)1989年11月9日夕刻、テレビにて「原則として出国の自由を承認の方向で審議中」と発言

→誤解により「すぐにベルリンの壁が解放」

→市民が検問所に殺到

→壁開放

a)1990年10月3日、東ドイツ、正式にドイツ連邦共和国に加盟

b)壁崩壊によって東西交流が活発化

c)1991年、ベルリンは統一ドイツの首都化

第5章　今後の展望

「ベルリンの壁崩壊」

a)肯定

→東西冷戦の象徴の破壊＝平和の象徴

b)否定

→東西の経済的格差の懸念